The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	社会・両親・子ども三者関係のダイナミックス : 学校への適応を中心にして
Author(s)	藤田, 綾子
Citation	大阪大学人間科学部紀要. 1976, 2, p. 241-256
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/9643
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

社会・両親・子ども三者関係のダイナミックス

—学校への適応を中心にして—

藤　田　綾　子

社会・両親・子ども三者関係のダイナミックス

—学校への適応を中心にして—

I 問　　題

本研究は，(1)両親の学校に対する関心と，(2)両親と子どもとの関係が，子どものスクール・モラールとどのように連関するかについて分析・考察することを目的にしている。

子どもの社会化に影響を及ぼす要因としての親子関係の重要性は，これまで多大の関心を集め，研究されてきている。（斎藤　1974）

パーソンズ（T.Parsons 1956）の指摘によれば，基本的かつこれ以上減らすことができない家族の機能として①成人のパーソナリティの安定化とともに，②子どもが真に自分の生まれついた社会のメンバーとなれるよう行なわれる基本的な社会化ということである。彼のこの指摘に代表されるように，生物的人間として生れた子どもが社会に出て一人前の人間として適応していくには，家庭の，特に両親の影響が大きくかかわっているといえる。パーソンズは，両親の役割を上述した機能と結びつけて社会と家庭をつなぐ道具・手段としての役割（Instrumental role）を父親がとり，家庭の中での安定化をはかる役割（Expressive role）を母親がとるとする。このような役割規定の妥当性は別として，両親のリーダーシップ機能として，Instrumental な機能と Expressive な機能の存在については，他の研究（Schaefer, 1965, 村尾　1966, 古川　1969, 小嶋　1969）によっても証明されている。

両親のとるこれらの二つの機能は，子どもの性格（古川 1972），学業成績（三隅他 1971）テスト不安（三隅他　1971），達成意欲（阿久根　1970）との連関で研究が行われてきた。これらの研究では，両親の Instrumental role を〝しつけ〟という次元でとらえられていることが多い。確かに，〝しつけ〟は，子どもの社会化にとって，両親の子どもへの影響的役割として重要な側面ではあるが，子どもは，社会化を〝しつけ〟の面からのみ吸収してはいない。クーゲルマス（Kugelmass, S.1965）が，パーソンズの Instrumentality-Expressivity を子どもとの関係と家庭全体との関係の二次元において考えるべきだとして，「両親が子どもに行う〝しつけ〟」と「両親が実際の社会をどのように伝えているか」という二つの機能にわけているように，親の子どもに対する影響は，具体的な〝しつけ〟のみでなく，親の行為が模倣されるべきモデルとして「社会」とどのようにかかわっているかということも関係してくる。つまり，社会・両親・子どもの三つの結びつきのダイナミックスの中で，子どもたちの社会化を把握する必要がある。（古川　1974）

ここで特に問題となるのは，両親と社会の関係，両親と子どもの関係をどの立場（観察者，親，子ども）からとらえるかということであるが，分析の視点は，子ども自身であることに留意すべきであろう。つまり，両親と社会の関係についての子ども自身の認知，評価が子どもに影響を与えるのだし，子どもと親との関係についても，子どもの認知が，子どもへの影響として大きなウエイトを占める。要するに，心理学的に重要なことは，現実に親がどのような態度を示したかということではなく，その親の態度を子どもがどう認知するかという点である。そこで，本稿では，子どもの認知の枠内でこれらの三者関係のダイナミックスを考察したい。

親の行為が，模倣すべきモデルとして子どもの目にうつるのは，乳児期からせいぜい少年期までであって，青年期になると知識の増大，自我の確立，生活領域の拡大とともに，親は絶対的権威ではなくなるし，親に対する愛着も仲間集団への愛着や同調ゆえに以前ほど強いものではなくなっていく。

こうしたことを考えると，社会・両親・子どもの三者関係が成り立つのは，少年期ごろまでであろうと考えられる。乳幼児期は，まだ両親と社会の関係，両親と子どもの関係を分化させて認知できるほどその能力も発達せず，両親＝社会と子どもとの二者関係しか存在しないと思われる。児童期は，認知能力も発達し，しかも，まだ仲間集団の影響もそれほど大きくないから，児童期の子どもを研究対象として設定しよう。

さて，本稿では，「社会」を「学校」で代表さして，学校・両親・子どもの三者関係について分析することにしたい。

児童期における子どもにとって，「社会」の最も具体的なイメージは「学校」だからである。もちろん，児童期の子どもが所属する「社会集団」は「学校」の他に，遊び仲間，兄弟関係，塾，クラブ仲間などがある。しかし，学校への適応に関して得られた分析結果は，「学校」を「仲間集団」あるいは「塾」への適応に置きかえても，ある程度妥当すると仮定し，「学校」を子どもにとっての代表的な「社会」だと考えておきたい。

広田（1973）は，「家庭で学校や先生をばかにしているようなことがあると，教育は効果がない」と述べているように，両親の学校に対する態度が，子どもの学校における態度に影響を与え，また，品川（1973）らが，登校拒否の子どもについて調査したところ，「これらの生徒の家庭には，家庭の中の人間関係，特に親との関係が悪いことが，登校拒否として表面に現われている問題徴候の背後に横たわっていることを痛感した」と報告している。このように，子どもの学校に対する態度には，親子関係の人間関係とともに，両親の学校に対する構えが影響を与えているようである。

そこで，本稿では，次の仮説をたてて，子どもの「学校に対するモラール」（スクール・モラール）と「両親の学校に対する関心」および，「両親と子どもの関係」との関連につい

て検討を加えることにしよう。

（仮説１）一般に，両親の学校に対する関心が強い場合，子どものスクール・モラールも高い。

（仮説２）両親と子どもの関係がポジィティブである場合，子どものスクール・モラールも高い。

（仮説３）父親の学校に対する関心が強く，かつ，母と子の関係がポジィティブであるか，父と子の関係がポジィティブで，かつ，母親の学校に対する関心が強い場合，相補作用によって子どものスクール・モラールも高い。

II　方　　法

被調査者　尼崎市内小学校４年生４クラス　男子　69名　女子　63名（計 132名）調査は，筆者が，アシスタントと共に集合調査法で行った。

調査期日　1974年11月

調査項目　＜親と子どもの関係の測定＞

測定項目は次の３問からなる。

(1)　あなたはお父さんを立派な人だと思いますか。

①　あなたはお母さんを立派な人だと思いますか。

(2)　あなたはお父さんのしつけについて不平・不満がありますか。

②　あなたはお母さんのしつけについて不平・不満がありますか。

(3)　あなたはお父さんが好きですか。

③　あなたはお母さんが好きですか。

以上の項目について（はい・どちらともいえない・いいえ）の３件法によって回答を求め，ポジィティブな方向に１点，ネガティブな方向に－１点を与え，どちらともいえないを０点として，それぞれ集計を行った。集計の方法は以下の質問についても同様である。

＜両親の学校に対する関心の測定＞

(1)　あなたのお父さんは学校の友だちのことに関心がありますか。

①　あなたのお母さんは学校の友だちのことに関心がありますか。

(2)　あなたのお父さんは学校の勉強のことに関心がありますか。

②　あなたのお母さんは学校の勉強のことに関心がありますか。

(3)　あなたのお父さんは受け持ちの先生のことに関心がありますか。

③　あなたのお母さんは受け持ちの先生のことに関心がありますか。

＜子どもの学校に対する適応度の測定＞

SMT（スクール・モラールテスト）日本文化科学社版を用いた。それは，大西（1967）らによって学校適応診断検査として開発されたものである。下位項目は①学校への関心②級友との関係③学習への意欲④教師への態度⑤テストへの適応の５要因であり，それぞれ15項目（省略）から構成されている。

Ⅲ 結　　果

(1) スクール・モラール得点の分布および内部相関

スクール・モラールテストの内部相関値は Table 1 に示す。

Table 1. スクール・モラールテストの内部相関値

	①	②	③	④	⑤	⑥
① 学校への関心		.507	.646	.571	−.109	.815
② 級友との関係			.513	.286	.029	.619
③ 学習への意欲				.494	.152	.743
④ 教師への態度					.003	.816
⑤ テストへの適応						.266
⑥ 全合計得点						

各要因のうち，①学校への関心②級友との関係③学習への意欲④教師への態度については内部相関値は相互に高く有意な値を示しているが，⑤テストへの適応は，他の４項目とは独立している。小学４年生レベルにおいては〝テスト〟ということが，子どもたちにとって日常の学校生活の中で重要視，特別視されているのではないかと思われる。普通の授業とは異った態度でテストに取りくんでいるために，テストに対して特別の気持を持ち，このような結果をもたらしたものと思われる。そこで，本研究では，スクール・モラールテストとして各下位要因を加算して用いるために，⑤のテストへの適応は除いて，①学校への関心，②級友との関係，③学習への意欲，④教師への態度の４要因を総計した得点をスクール・モラール得点として集計を行った。各要因間の相関値をもう少し細くみてみると，①②④の要因と，①②の要因がひとつ大きくまとめられそうであり，③学習への意欲という課題指向的な面と②級友，④教師への態度，という対人指向的な面にわけられ，①学校への関心は，②③④と高い相関値を示している。

Fig. 1 は，各クラスごとの， Fig. 2 は，男・女別のスクール・モラールテストの分布で

ある。クラス間，男・女間の差について検討を行った結果，スクール・モラールテストは，クラスによって差がみられるが（P<.05），男・女差はないことがわかった。

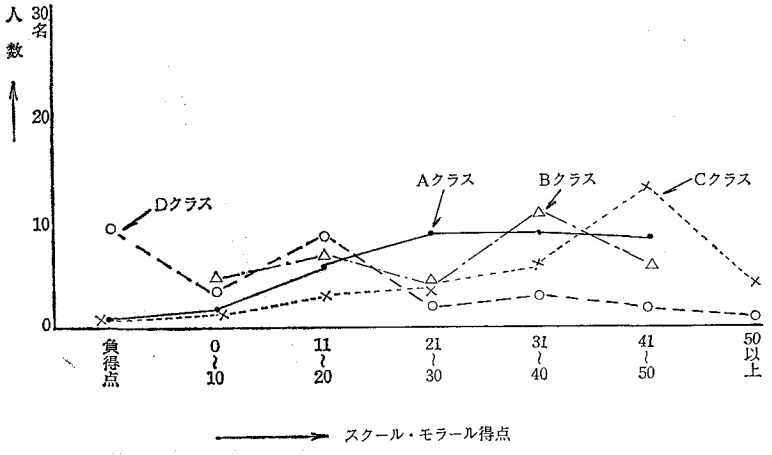

Fig. 1. クラスごとのスクール・モラールテストの分布

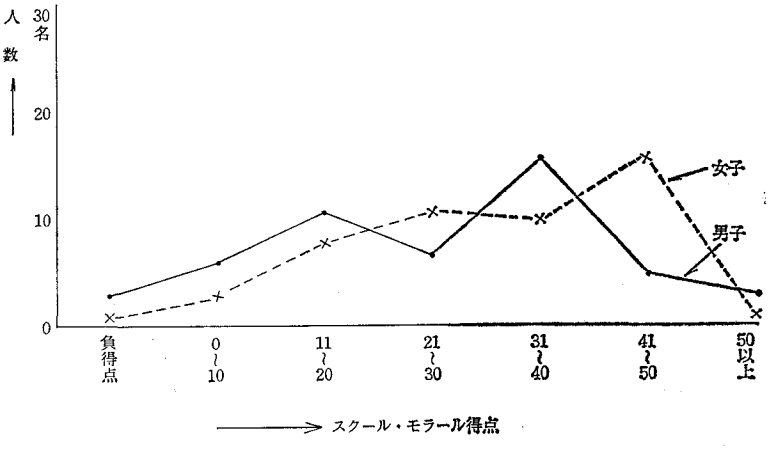

Fig. 2. 男・女別のスクール・モラールテストの分布

そこで，各クラスごとにどのような差がみられるかについて検討するために，スクール・モラール得点のメディアン値を算出し，メディアン以上と以下を各クラスごとにわけて，検定を行った結果，Dクラスのみが（Fig.1 参照）他のクラスより有意に低い者の多いことがわかり，A・B・Cクラス間の間には差はみられなかった。

(2) 親—子関係の分布

父—子関係，母—子関係得点の分布は，Fig.3 に示すとうりであるが，J字型曲線を描い

て，正規分布ではない。男・女差，各クラス間での有意差をメディアン値で高・低に区別して検定したところ差はみられない。母—子関係と父—子関係の間にも有意差はなかった。

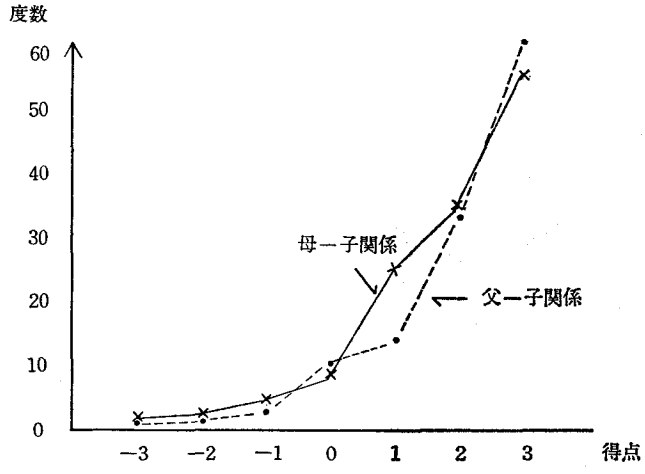

Fig. 3. 父—子，母—子関係の分布

(3) 両親の学校に対する関心の分布

父—学校関係，母—学校関係の分布は Fig.4 に示すとうりである。クラス間，男・女差についてメディアン値を中心に高低にわけて検定を行ったところ差はみられないが，父—学校関係と母—学校関係の分布には差がみられ，母親の学校に対する関心が父親のそれよりもより高い者の多いことを示している。

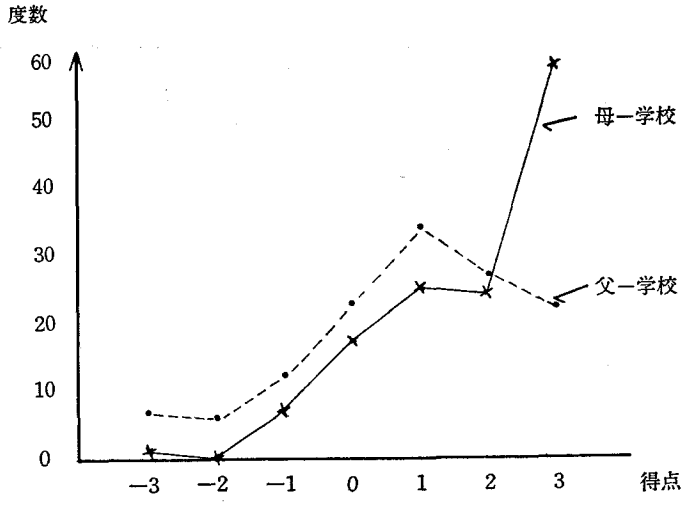

Fig. 4. 父—学校，母—学校の分布

以上，調査項目についての検討の結果，スクール・モラール得点についてのみクラス差があらわれ，両親—学校関係，両親—子ども関係には，クラス間で違いはなかった。スクール・モラール得点については各クラスの担任教師やクラスの雰囲気によって影響を受けていることは当然である。

本研究の目的は，クラスの影響を受けている部分を出来るだけ除去したスクール・モラールと両親と子どもの関係をとらえることにあるので，スクール・モラール得点の差を見出さないA・B・Cの3つのクラスについて分析を行う。これらの3つのクラスの間には，親—子関係，親—学校関係の項目についても有意差がみられないので，プールして同一集団として分析を行う。

(4)　調査項目間の関係

Table 2 は，Dクラスを除いた各項目間の ϕ 係数値である。ϕ 値算出にあたっては，各項目が正規分布をなしていないので，メディアン値を算出し，メディアン以上を高得点群，メディアン以下を低得点群として x^2 検定とともに ϕ 値の算出を行った。

その結果，母—子関係と父—子関係の ϕ 値は.54で連関性が高い。また，父—学校と母—学校の間の ϕ 値も.48とかなり高い。スクール・モラールテストとの関連では母—学校関係と父—子関係が有意な関連のあることを示している。

Table 2.　調査項目間の相関表

調査項目	父—子	母—子	父—学校	母—学校	SMT ㊟
父 — 子		x^2=30.02 ϕ=.54 *	x^2=8.92 ϕ=.29 *	x^2=15.05 ϕ=.38 *	x^2=11.68 ϕ=.34 *
母 — 子			x^2=8.58 ϕ=.29 *	x^2=16.57 ϕ=.40 *	x^2=2.59 ϕ=.16
父—学校				x^2=23.77 ϕ=.48 *	x^2=2.92 ϕ=.17
母—学校					x^2=7.92 ϕ=.28 *
S M T					

㊟　SMT＝スクール・モラールテストの略
$x^2=n\phi^2$　但し n=101（Dクラスを除く）
* P<.05

(5)　調査項目とスクール・モラールテストとの関連性

Table 3〜8 は，スクール・モラールテストとの関連で，父—子関係，母—子関係，父—学校関係，母—学校関係の交互作用をみるために，まず2変数づつとり出して角変換法（正規分布でないため）による分析を行った。Table 3〜8 からも「母親の学校に対する関心」と「父親の子どもに対する態度」の2変数は，スクール・モラールテストと連関することが

確認された。（Table. 2 参照）4変数のうちから，2変数づつの組み合せを作った交互作用については，（母—学校）を（父—子）関係の交互作用が傾向としてみられる（P<.10）が，有意ではない。

このことは，父親の子どもに対する態度と母親の学校に対する関心が，子どものスクール・モラール得点とそれぞれ質の異った連関の仕方をしていることを示すであろう。本調査のスクール・モラールテストは5つの要因から成り立っているが，テストへの適応という要

Table 3-1　父—子関係・母—子関係とスクール・モラール

( ) %

父—子関係	高		低	
母—子関係	高	低	高	低
スクール　高	23(62.2)	8(61.5)	3(30.0)	14(34.1)
モラール　低	14(37.8)	5(38.5)	7(70.0)	27(65.9)
計	37(100)	13(100)	10(100)	41(100)

Table 3-2　角変換による平方和分析表

変動因	平方和(ss)	df	$x^2=ss/\sigma\omega^2$	有意性
(1) 父—子関係	306.25	1	6.54	<0.01
(2) 母—子関係	1.51	1	0.03	n.s
(3) 交互作用	1.51	1	0.03	n.s
(4) 群間	309.27	3	6.60	n.s
(5) 群内	—	—	$\sigma\omega^2=46.86$	

Table 4-1　父—学校・父—子関係とスクール・モラール

( ) %

父—子関係	高		低	
父—学校関係	高	低	高	低
スクール　高	23(60.5)	8(66.7)	10(41.7)	7(25.9)
モラール　低	15(39.5)	4(33.3)	14(58.3)	20(74.1)
計	38(100)	12(100)	24(100)	27(100)

Table 4-2　角変換法による平方和分析

変動因	平方和(ss)	df	$x^2=ss/\sigma\omega^2$	有意性
(1) 父—子関係	306.25	1	7.92	<.001
(2) 父—学校関係	8.58	1	0.22	n.s
(3) 交互作用	42.51	1	1.11	n.s
(4) 群間	357.91	3	9.26	<.001
(5) 群内	—		$\sigma\omega^2=38.65$	

Table 5-1 父—子関係，母—学校関係とスクール・モラール

( ) %

父—子関係	高		低	
父—学校関係	高	低	高	低
スクール 高	21(61.8)	9(60.0)	10(62.5)	8(22.2)
モラール 低	13(38.2)	6(40.0)	6(37.5)	28(77.8)
計	34(100)	15(100)	16(100)	36(100)

Table 5-2 角変換法による平方和分析表

変動因	平方和(ss)	df	$x^2=ss/\sigma\omega^2$	有意性
(1) 父—子関係	158.38	1	4.14	<.05
(2) 父—学校関係	123.54	1	3.22	<.10
(3) 交互作用	135.84	1	3.55	<.10
(4) 群間	417.76	3	10.92	<.01
(5) 群内	—		$\sigma\omega^2=38.26$	

Table 6-1 母—学校・父—学校関係とスクール・モラール

( ) %

母—学校関係	高		低	
父—学校関係	高	低	高	低
スクール 高	26(61.9)	4(57.1)	7(35.0)	11(34.4)
モラール 低	16(38.1)	3(42.9)	13(65.0)	21(65.6)
計	42(100)	7(100)	20(100)	32(100)

Table 6-2 角変換法による平方和分析表

変動因	平方和(ss)	df	$x^2=ss/\sigma\omega^2$	有意性
(1) 母—学校関係	206.21	1	4.05	<.05
(2) 父—学校関係	2.59	1	0.05	n.s
(3) 交互作用	1.72	1	0.03	n.s
(4) 群間	210.52	3	4.14	n.s
(5) 群内	—		$\sigma\omega^2=50.90$	

Table 7-1 母—子関係・父—学校関係とスクール・モラール

( )%

母—子関係	高		低	
父—学校関係	高	低	高	低
スクール 高	19(52.8)	7(63.6)	14(53.8)	8(28.6)
モラール 低	17(47.2)	4(36.4)	12(46.2)	20(71.4)
計	36(100)	11(100)	26(100)	28(100)

Table 7-2　角変換法による平方和分析表

変　動　因	平方和(ss)	df	$x^2=ss/\sigma\omega^2$	有意性
(1) 母—子関係	23.86	1	2.47	n.s
(2) 父—子関係	87.33	1	0.48	n.s
(3) 交互作用	245.70	1	2.88	n.s
(4) 群　　間	356.89	3	5.82	n.s
(5) 群　　内	—	$\sigma\omega^2=39.59$		

Table 8-1　母—子関係・母—学校関係とスクール・モラール

( )%

母—子関係	高		低	
母—学校関係	高	低	高	低
スクール　高	19(57.6)	7(50.0)	11(68.8)	11(28.9)
モラール　低	14(42.4)	7(50.0)	5(31.3)	27(71.1)
	33(100)	14(100)	16(100)	38(100)

Table 8-2　角変換法による平方和分析表

変　動　因	平方和(ss)	df	$x^2=ss/\sigma\omega^2$	有意性
(1) 母—子関係	8.61	1	0.22	n.s
(2) 母—学校関係	190.30	1	4.87	<.05
(3) 交互作用	89.97	1	2.30	n.s
(4) 群　　間	288.88	3	7.39	n.s
(5) 群　　内	—	$\sigma\omega^2=39.10$		

Table 9　スクール・モラールテストの下位項目と父—子関係・母—学校関係

スクール・モラールテスト	学校への関心	級友との関係	学習への意欲	教師への態度
父—子　関　係	$x^2=4.38$ $^{**}\phi=.20$	$x^2=2.30$ $\phi=.14$	$x^2=6.51$ $^{**}\phi=.24$	$x^2=2.60$ $\phi=.17$
母—学校関係	$x^2=7.21$ $^{*}\phi=.26$	$x^2=7.83$ $^{*}\phi=.28$	$x^2=2.25$ $\phi=.14$	$x^2=6.75$ $^{*}\phi=.26$

*　P<.01　　**　P<.005

因を省いて，(1)学校への関心，(2)級友との関係，(3)学習への意欲，(4)教師への態度が測定尺度であることは前述した。そこで，これらの要因と①父親—子ども関係，②母親—学校関係について分析したのが Table 10 である。

各要因のうち，「学校への関心」には，父—子関係と母—学校関係とが有意なϕ相関値を示している。「級友との関係」とのϕ相関値が高いのは母—学校関係，「学習への意欲」には父—子関係，「教師への態度」には母—学校関係が有意なϕ相関値を示している。この結

果から，学校への関心，級友との関係・教師への態度の3要因には，母—学校関係が強い連関を示し，学習への意欲と学校への関心には，父—子関係が強い連関を示している。ここで，父—子関係，母—学校関係の2要因に共通に強い連関を示している「学校への関心」を除いて考えると，父—子関係の関与する部分は，学校のいろんな分野の中で，学習達成への部分であり，母—学校関係が関与するのは，級友との関係・教師への態度の対人関係に関する部分であることがわかる。このことから，スクール・モラールテストに関与しているとしてTable 6で有意な値の出た母—学校関係と父—子関係の間に，相互作用がはっきりとみられなかった理由が解明できた。

Ⅳ 考　　察

(1) 測定尺度について

本調査で用いたスクール・モラールテストは，大西（1967）らの手引書によれば，下位要因のプロフィールと総計から，個々人の学校へのモラールの程度を診断するようにできている。各要因と全合計点との内部相関値は，かなり高いので，合計点をスクール・モラール得点として取り扱うことに異論はないが，各要因の分布は，かなり異なるので若干の問題は残る。（各要因の分布は本稿では示していない）

結果でもすでに述べたが，「テストへの適応」は，小学4年生の児童にとっては不適当な項目のようである。次に，スクール・モラール得点についてのクラス間の差についてであるが，1クラスだけ他のクラスより有意に低いクラスがみられた。スクール・モラールを決定する要因としては，ここで取り上げている両親—学校関係，両親—子ども関係のみではなく，教師のリーダーシップの影響も大きいと考えられる。本調査対象の4クラスのうち3クラスについては，クラス間に有意な差はみられないので，いちおう，教師の影響はコントロールされたものとして，上述した親—学校関係と親—子ども関係の連関について分析した。従って，有意に低いスクール・モラール得点を示した1クラスは，分析対象から除かれている。

結果の整理を行う前までは，スクール・モラールテストは担任教師が異れば，もっと影響を受ける程度が違うのではないかと推則されたのだが，今回の調査対象クラスに関しては，4クラスのうち3クラスまでが差がなく，スクール・モラールテストへの教師のリーダーシップの影響は，それほど一般に大きくないのか，それとも，偶然，この3クラスは同様なタイプの教師であったのか，差のあった1クラスの問題をも含めて考えなければならない点である。

男・女差に関しては，スクール・モラール得点に違いはみられなかった。手引き書では，

男子より女子の方が若干高い得点を示す傾向のあることが記されているが，本稿のデータにおいては，そのような傾向はみられなかった。小学4年生の段階ではまだ男・女差の出ない段階ではないだろうか。また，西山ら（1972）は，このスクール・モラールテストを正規分布をするがごとく用いているが，本論のデータについて正規性の検定を行ったところ正規分布とはいえないので，このあたりも若干問題を残している。

測定尺度のうち，父—子関係，母—子関係については結果でも述べたように，メディアン値で，上下にわけると，3点とそれ以下（－3～2）に分かれる。質問が，「おとうさんを立派な人だと思いますか」「おとうさんのしつけについて不平・不満がありますか」「おとうさんが好きですか」というように，社会的望ましさがはっきりとしている項目であり，ネガティブな方向には，なかなかつけにくい項目であるので，当然の傾向であるが，このような項目であるにも拘らず，ネガティブな評定を与えた子どもの親子関係と，3点を点えた子どもの親子関係とは質的な差があると思われる。

母—学校，父—学校関係の尺度についてみると，母親が父親よりも学校への関心が有意に高いことを示し，母親が子どもの学校教育に対して強い関心を示していることをあらわしている。

パーソンズ（1956）説に従うかぎり，社会（本稿では学校）と子どもとを結びつける役割を果たすのは，父親であるはずであるが，本データではもっぱら母親がその役割をになっている。これが，学校への関心ではなく，社会生活・ライフ・モラール（生きる意欲）への関心であるならば，父親の役割が，母親のそれをうわまわるだろうといえるだろうか。子どもと社会を結ぶ両親の役割が，子どものかかわる社会が何であるかによってどのように異ってくるのか興味深い問題である。

最後に，仮説について考察を行う。仮説1は，母親—学校関係が子どものスクール・モラールと連関することで検証されたが，父親の学校に対する関心は，子どものスクール・モラールとは連関しないことがわかった。仮説2は，父—子関係と子どものスクール・モラールは連関することで証明されたが，母—子関係とスクール・モラールとの連関はないという結果が示された。仮説3について，両親—子ども関係と両親—学校関係の間の交互作用は見出せず，検証されなかった。

さらに，仮説では設定しえなかった次の結果が見い出された。つまり，父親と母親では，子どものスクール・モラールに対して影響の与え方が異っている。即ち，スクール・モラールの下位要因のうち「学習への意欲」には父—子関係がかかわっており，「級友との関係」「教師への態度」には母—学校関係がかかわって，そして，スクール・モラールテスト全体として，父親と母親の両方の役割が相補しあっているといえるだろう。

以上，学校，両親，子どもの三者関係について，子どものスクール・モラールを中心に分

析を行い，「母の学校に対する関心」と「父と子どもとの関係」の2要因が，子どものスクール・モラールと高い相関関係を示すという結果を得たが，さらに，残された方法論上の問題について若干記しておきたい。

まず，調査項目についてである。親―子関係を測定する項目は，〝子どもが親を受け入れているか否か〟という感情次元でとらえ，親―学校関係を測定する項目は，〝子どもが親の行動をどのように評価しているか〟という評価次元でとらえよう〟という目的で選んだのであるが，項目の分布を描くと，社会的望ましさの方向に回答されている傾向にあることがわかる（正規分布を示さず，高得点に片寄り，Jカーブを描く）。子どもは，これらの項目に回答をする場合，現実の自分の親子関係というより，社会的望ましさという方向で回答したのではないかと推測される。また，非常に大きな概念（親―子関係）（親の学校に対する関心）を，アプリオリに設定した3項目で測定を行っているので，より詳細な概念を設定した上での項目作製が必要である。しかし，従来の子どもと親の関係が，特に親のリーダーシップの問題としてとりあげられるとき，子どもの家庭の中での〝しつけ〟という面にのみ焦点をあて，家庭という枠組の中で〝おとなしい，いい子〟にするための研究が多かったのであるが，本データから，子どもを「社会」との関連でとらえるべきであるということ，即ち，社会・両親・子どもの三者関係の構造でとらえる必要性が示唆された。

（付記　本研究にあたっては，浜口助教授に懇切な御指導をいただいた。また，4年生の粟村邦子さんの助力を得た。付して感謝いたします。）

阿久根求・篠原しのぶ　1970　「オーバー・アンダーアチーバーの要因分析(2)」日教心第12回総会発表論文集，pp. 535-536
古川綾子　1969　「親のPM式リーダーシップ測定(1)」日心33回大会発表論文集，p.293
古川綾子　1972　「親の自己認知と子どもの認知による子どもに対する両親のリーダーシップ行動について」実社心研，vol. 12, No. 1, pp. 41～52
古川綾子　1974　「社会・両親・子ども三者関係のダイナミックス」少年補導，vol. 19, No. 11, pp. 18～24
広田君美　1973　「学校と家庭のコミュニケーション」児童心理，vol. 27, No. 11, pp. 73～78
Kugelmass, S. 1965　The Perception of Parents by Adolescents: Consideration of Instrumentality-Expressivity Differentiation Hum. Relat. 18, pp. 103-113.
小嶋秀夫　1969　「親子関係質問紙の項目水準におけるバッテリー間因子分析」日心33回大会発表論文集，p. 292
三隅二不二・阿久根求　1971　「両親の指導性が子どもの学業成績・テストと適応性に及ぼす効果」教社心研，vol. 10, No. 2, pp. 79-90
村尾能成　1966　「親の養育態度と子どもの性格」心理学への招待　六月社　pp. 219-260
西山啓　1971　「スクール・モラールに関する研究」日教心第13回総会発表論文集，pp. 422-425
T. Parsons and R. F. Bales 1956　Family, Socialization and Interaction Process（橋爪他訳；『核家族と子どもの社会化』黎明書房　1970）
Schaefer, E. S. 1965　"A Configulational Analysis of Children's Reports of Parent Behavior." J. Consult. Psychol., 29. pp. 552-557
斎藤耕二　1974　社会化の心理学　川島書店
品川不二郎　1973　「登校拒否児にとっての学校」児童心理，vol. 27, No. 11 pp. 107-112

GROUP DYNAMICS IN SOCIETY • PARENT • CHILD RELATIONSHIPS
—FROM VIEW POINT OF SCHOOL MORALE OF CHILD—

AYAKO FUJITA

The purpose of this research is to analize the each correlations among the school morale of children, parent's interest in school or parent-child relationships.

The hypothesis are as follows.

(1) The school morale of child has very much to do with the parent's interest in the school activities.

(2) And also with parent-child relationships.

(3) The school morale will be increased under the conditions as follows.

(a) The father's strong interest in school activities and mother-child positive relationships.

Or

(b) The mother's strong interest in school activities and father-child positive relationships.

Subjects are 10 or 11 years old (4th grade of elementary school children N=132).

I got the results as follows.

(1) Father-child relationships and mother's strong interest in school have correlation with school morale of child significantly.

(2) Father-child relationships has correlation with the task-oriented factor of school morale (concern to school, motivate to learn) significantly.

(3) Mother's interest in school has correlation with the human-oriented factor of school morale (concern to school, relation to teacher and relation to friends) significantly.